「大学生を対象とした農業体験と意見交換会」開催概要
～食の大切さを農業とともに考えよう！～

■日　時：平成23年10月15日（土）　10：00～15：00
■場　所：岡山県吉備中央町
　　岡山県農林業実践学習の里「体験学習農園」
■参加者：17名（くらしき作陽大学学生14名と先生3名）
■主　催：中国四国農政局

■概　要
【午前の部】10：00～11：30
　1　開会あいさつ
　　消費・安全部　石場部長
　2　農作業体験
　　●作業内容（指導：体験学習農園塾長）
　　・管理機を使っての耕耘
　　・畝立て
　　・ホウレン草の播種

【昼　食】
「県産自給率100％豚汁」
「かまどで炊いたおにぎり」

【午後の部】13：00～15：00
　3　意見交換会
　●食農教育有識者による講演
　　「食育の体験が育てるもの」（広島県三原市立南方小学校校長　東　佐都子氏）

《講演要旨》

〇自分は、幼少期の農作業の中で、米一粒にどれだけ多くの人の努力、願いが詰まっているかを周りの大人たちによって教えられた。
〇直に土に触った体験、農作物が生長する過程をつぶさに見て育った子どもは違ってくる。子どものときに育った感性はいつまでも続く。
〇長年の教員生活の中で、子どもたちの給食を食べる状態がおかしくなってきたという感覚を持っている。
　・食べる物を粗末に扱う。それが年を経るごとに加速してくる。
　・食材に何が入っているかわからない。
　・食べ残し（残渣）が増えてきた。
　・茶碗やお盆にごはん粒がたくさんついている。
　・食べるものがあるのが当たり前という感覚。

・食べることに対しての感謝の気持ちが薄れてきている。
〇食べられるということに対して当たり前ではないということを感じさせない限り、子どもたちに食べ物がありがたい物だということを教えてもわからないと思った。
〇失敗から得るもの。失敗して初めて、何が原因だったか、次に失敗しないためには何をしたらいいかを学べる。
〇知識を知恵に変えないと意味がない。壁にぶつかることによって、今の子どもたちの世界に程遠い知恵を、知らず知らずのうちに身につけさせたい。
〇一からやらせる、全てを自分たちの手で行わせる。整理されていない畑を与え、いかに失敗させるか、越えられそうにない壁、しかし、何とかしたら超えられる壁にいかにぶつけるか。これが「給食を作ろう大作戦！」の狙いの一つ。
〇給食を食材を育てるところから全て自分たちで行なう「給食を作ろう大作戦！」での子どもたちへの条件
・家からは何も持ってきてはいけない
・お金は1円もない
・7人の教員は相談には乗るが、一切あてにならない
・あてにするのは、地域の100名の支援ボランティア
・いよいよ困ったら校長先生を説得し、了解を得ること
〇平成14年4月から取組スタートし、10月末の4日間給食を止めるまでがこの取組の期間。教員7名がかかわったが、「手出し、口出し一切無用」これが教員の合言葉。
〇その当時の子どもたちには異年齢集団でコミュニケーションをとる能力が欠けていた。その能力をつけるために1つのグループを3年生から6年生までの各学年の児童で組み、9つのグループを作った。
〇子どもたちは様々な壁にぶつかった。例えば、米作りを忘れて学校から一番遠い田んぼを借りに行き、田植えと稲刈りのときのバスの借り上げ代金をバス会社の合見積もりまでとって、交渉に来たこともあった、自分たちで作った野菜を販売して資金を捻出したり、牛乳を作るため乳牛を借りる約束をしてきた。このように、じっくりと待てば、あらゆる知恵を出し合い、クリアしていく力を持っている。
〇この体験を通して、子どもたちの食に対する姿勢が180度変わった。給食一食が多くの人たちの力によって作り上げられているのか、自然の恵みがいかに大切なのかを実感させることができた。
〇卒業式では、入場してきた6年生よりも先に、3年生以上の在校生が号泣した。これは、いかに6年生が下級生に対して良いリーダーシップを発揮したかということを実感した。
〇2年後にNHKが追跡取材をし、中学生2年生になった当時6年生だった児童たちにインタビューを行った。その中で子どもたちは、「僕たちは物がない時代になっても何かを工夫して、自力で食べる物を作って生きていける。」と話した。
〇土に触れる体験はどこでもやることができる。命のありがたさも植物を通してたくさん教えることができる。

●意見交換
《主な意見》
〇栄養教諭になったら、生徒に農業体験、生産活動に参加させることをしたいと思っていたので、今日の体験は大変勉強になった。
東先生の話を聞いて、私自身の食に対する価値観というものが変わってきた。
〇東先生の話で、子どもたちには失敗させたほうがいい、壁を作った方がいいということを自分は考えたことがなかった。自分が実習に行っても、いかに正解を答えてもらうかということを考えていたので、参考にしたいと思った。自分は今でも人に頼ってしまう気持ちがあるので、これからは自分で動いていこうと思った。
〇東先生の話を聞いて、大人が口出ししたいのを抑えて子どもたちに任せたというのは、子どもたちを信じているからできることだと思う。そういう先生に指導された生徒たちは幸せだったと思った。

〇収穫の体験はあったが、植えるところの経験がなかったので楽しかった。お昼のかまどで炊いたご飯のおにぎりはとてもおいしかった。
東先生の話を聞いて、自分も教師を目指しているが、自分がまず体験をして子どもたちに教えていけるような先生になりたいと思った。

《まとめ》
（東先生）
今日講演をして、くらしき作陽大学へ行って、皆さんと一緒に話をしたり、一緒に活動したいという思いを持った。こういう感覚の学生がいるということを、今日意見を聞かせてもらい力をもらった。
最後に、「子どもは信ずるに足る存在である」。私達が信じて待てば、そして、できるということを子どもたちに思わせられるならば、子どもは本当にそれ以上の力を発揮して生きる力を身につけていく、信ずるに足る存在である。

４　閉会あいさつ　　消費生活課　渡部課長